

「心の傷を癒すということ」～私たちが伝えたいメッセージ～

安 成洋¹⁾、安達もじり²⁾、田中 究³⁾

1)こころの傷を癒すということ製作委員会、2)NHK大阪放送局、3)兵庫県立ひょうごこころの医療センター名誉院長

「心の傷を癒すということ」という著作があります。著者は安克昌（あんかつまさ）という神戸の精神科医です。（故人。2000年12月肝臓がんで死去）

阪神淡路大震災の時、自ら被災しながら、全国から集まった精神科医のボランティアをコーディネートし、精神科救護所・避難所などで、カウンセリング・診療など救護活動を行ないました。この著作には、阪神淡路大震災発災の約2週間後に始まり、約1年間掲載された産経新聞の連載記事「被災地のカルテ」を中心に、震災発災から安が亡くなるまでの約5年10カ月余りの「被災者の心の問題」について執筆されたエッセイや論考が収められています。

この著作を原案として、「心の傷を癒すということ」というNHK土曜ドラマが制作され、2020年1月に全4回で放映されました。そして放映翌年の2021年1月にドラマを再編集し、劇場公開されました。（劇場版は、下記の通りオンラインで無料配信しています）

【チャリティ・オンライン配信】開始のご案内 | 映画「心の傷を癒すということ 劇場版」製作委員会
(https://note.com/kokoroiyasu_mov/n/n000ce318bc24)

今回の「市民公開講座」では、安克昌の同僚で親友の精神科医・田中究氏、ドラマ・映画「心の傷を癒すということ」演出の安達もじり氏、安克昌の実弟で映画「心の傷を癒すということ」製作委員会の安成洋の三人が、著作及び映像で描かれている「心の傷を癒すということ」について、三人それぞれの思いや考えを、皆さんにお伝えしようと思います。

当日は映画のシーンや著作の一部を、スライドを使って紹介させて頂きながら、お話を進めて行く予定です。

（田中究氏からのコメント）

映画の中であった、「心の傷を癒すということ」とはなにかということを中心に私の考えを話すことになるかと思っています。精神医学的な視点だけではなく、日常の中、一見見えない中に、さまざまな「心の傷」があり、それが何かのきっかけでうずき始める。

それに気付くこと、それは「心の生ぶ毛」（中井久夫先生の言葉です）を大切にすることではないかということを考えています。

それは最近ではコンパッション（compassion）と言われてたりしますが、ほくはmentalizeということばを使ってお話しできればと思っています。

それが人と人との結びつきをしっかりとしたものにする、「だれもひとりぼっちにしないことや」につながるように思っています。

（安達もじり氏からのコメント）

「心の傷を癒すということ」のドラマ化・劇場版化の経緯、取材を通して見えた安克昌先生の思い、「だれもひとりぼっちにさせへん」というセリフに込めたドラマ制作者の思い、「心の傷を癒すということ」の姉妹作としての映画「港に灯がともる」を製作した経緯と、お話をさせていただきます。

（安成洋からのコメント）

私たち三人兄弟（克昌の上にもう一人兄がおりましたが、9年前に亡くなっています）は、所謂「在日コリアン」の2.5世です。（父が1世、母が2世）

その出自故に、幼少の頃からずっと思い、考え、悩み、探求してきたことが、安克昌という人間形成に大きく影響を与えました。著作、映像作品、そして故人本人が私に語ったことをご紹介します。「いま、私が思うこと、考えること」をお伝えできればと思っています。